

1	言葉
言葉の力をつけよう（音読1年②） 「古典落語「まんじゅうこわい」」	
名前	

★「まんじゅうこわい」も古典落語の代表的な作品です。声に出して読んでみましょう。

まんじゅうこわい

若い男たちが一人の家に集まって、雑談をしているうちに、こわいものについての話題になりました。

「おれは蛇へびがこわい。あの動き方が嫌いやだ。」「おれは狸たぬきがこわい。お化けおばけに姿すがたを変えるから。」「おれはクモだ。クモの巣すはねばねばする。」「おれはコウモリだ。夜飛よとびやがる。」「おれは毛虫だ。葉っぱの裏うらに隠かくれていやがる。」「おれはアリだ。一列いちれつになって動きやがる。」

みんなこわいものを話す中で一人だけ黙だまっているものがいました。

「おい、光みつつあん。こわいものはないのかい。」「こわい！ こわいもんなんか何もないよ。」

「蛇もクモもお化けもこわくないんかい。」「そんなものはこわくないよ。」

「蛇、そんなものは頭が痛いたいとき、頭にまきや涼すずしくならあ。」「たぬき、お化けが出たら、料理りょうりして、洗あらってきれいにしてやらあ。」「クモ、納豆なつとうに混まぜてかき回してやらあ。」「コウモリ、傘かさにしてやらあ。」

「毛虫、棒ぼうをさして歯ブラシにしてやらあ。」

と、言いながら、光つつあんは突然話とつぜんすのを止めてしまった。

「どうしたんだい。」「こわいものを思い出しちゃった。」「それはなんだい。ぜひ教えてくれよ。」

「まん、まんじゅうがこわい。」「まんじゅう、そりやどういう動物どうぶつだい。」「動物じゃないんだ。店で売っているものなんだ。ああ思い出しただけで気持ち悪くなる。」

顔色かおいろがみるみるうちに悪わるくなってきた。

「ああ、座まつてられない。隣となりの部屋ふとんに布団ふとんをしいてくれ。」

床に入ると、とうとう布団で顔をおおってしまいました。

これを見て、みんなは笑わらって、いたずらをするにしました。

数人が町へ出かけて色々なまんじゅうを買かってきました。酒まんじゅう、温泉まんじゅう、蕎麦そばまんじゅう、栗まんじゅう、赤まんじゅう、白まんじゅう、葬式そうしきまんじゅう、肉まんじゅう色々です。

おぼんにまんじゅうを乗のせると、こっそり枕元まくらもとに運び、気が付くのを待ちました。

「ねえ。光つつあん。起きなよ。もうお開きだよ。」「わかったよ。起きるよ。でも、もうまんじゅうのことは言いわないでくれよ。」「わかったよ。もう話わさないよ。」

大きな叫さけび声が聞こえた。

「うわ、まんじゅうだ。まんじゅうが一杯いっぱいだ。」

となりの部屋へやのみんなは大満足だいまんぞく。

「おいみんな、どうしてこんなことをするんだよ。約束しただろう。まんじゅうこわい。まんじゅうこわい。」

大きな声をあげれば上げるほど、みんな大喜おどろび。

「うわ、酒まんじゅうだ。こわい、こわい。」「うわ、栗まんじゅうだ。こわい、こわい。」「うわ、まんじゅうこわい。うまいし・・・こわい・・・」

様子のおかしいのに気がついて部屋の中をのぞいてみました。

「うれしそうだぜ。まんじゅう食たってるぜ。こりやだまされた。ねえ、光つつあん、ほんととは、一体何がこわいんだい。」

「本当にこわいのは、熱あつくておいしいお茶だ。」